

中学生・高校生による 読書の現状とその問題点

―ライトノベルの位置と国語教育、読書指導―

大橋 崇行

キーワード：国語教育、読書、ライトノベル、図書館、ヤングアダルト
要約

現在の中学校や高等学校における国語教育においてもっとも重要な問題のひとつとして、どのようにして子どもに読書をさせるのかということが挙げられる。これまでこの問題については、まったく本を読まない「不読者」をいかに減らすかということが特に重要視され、国による法整備や、自治体、学校による数多くの試みがなされてきた。その結果、現在では「不読者」は一時期に比べて大きく減少している。一方で現在では、あらたな問題が生じている。本論ではその点について、各種調査の結果から、中学生や高校生が実際に読んでいる本の内容を含めた、具体的な実情について分析をした。その結果、中高生の読書が、娯楽のための読書に大きく偏りが生じているという問題を指摘した。また、その原因は、中学校や高校で行われている活動そのものに内在しているという問題について考察した。その上で、読解力の向上や、多様な知識を得る

ための読書を、娯楽としての読書とどのように両立させるのかこそが、現在の読書指導における問題だと結論づけた。

1 はじめに

平成二十年一月十七日の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」の「7 教育内容に関する主な改善事項」(1) 言語活動の充実¹⁾では、特に読書活動に関連して次のような指摘がなされた。

第二に、読書活動の推進である。言語に関する能力をはぐくむに当たっては、読書活動が不可欠である。学校教育においては、例えば、国語科において、小学校では、児童が日常的に読書に親しむための指導内容を、中学校においては生徒の読書をより豊かなものにするための指導内容をそれぞれ位置付けるなど、各教科等において、発達の段階を踏まえた指導のねらいを明確にし、読書活動を推進することが重要である。もちろん、読書習慣の確立に当たっては家庭の役割が大きい。学校、家庭、地域を通じた読書活動の一層の充実が必要である。

現行の学習指導要領はこれを色濃く反映したものであり、『高等学校学習指導要領／新旧対照表』で見ても、国語教育における読書の取り扱いについての記述が大幅に増加していることがわかる。

たとえば、平成二十一年三月九日に改正された『高等学校学習指導要領』(文部科学省告示第三十四号)の「国語総合」では「C 読むこと」

に関する「3 内容の取扱い」として、「自分の読書生活を振り返り、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うこと」と規定されている。また、「現代文A」では「1 目標」として「近代以降の様々な文章を読むこと」によって、我が国の言語文化に対する理解を深め、生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。」とある。同様に「現代文B」では「近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。」ということが掲げられており、国語教育を読書指導へと接続させていくことが、ひとつの問題意識として位置づけられている。

具体的に『高等学校学習指導要領解説／国語編』に目を向けてみると、たとえば「国語総合」における「読書指導」について、次のように記述されている。

読書においては、単に文章を無秩序に読むというのではなく、多種多様な書物の存在を知り、その中から自分にとって必要なものを選んで継続して読むことが重要である。その際、定期的に「自分の読書生活を振り返」ることが、読書生活を豊かにすることにつながる。

また、読書に対して興味・関心を持ち、自ら進んで読書しようと

する意欲をもつことも大切である。興味・関心をもつことが、同じ分野の本を読み深めることにも、様々な分野の本へと幅広く読み広げることにもつながっていく。

「読書の幅を広げ」るには、生徒自らが学校図書館の司書教諭や地域の図書館の司書などによる適切な助言を受けることが有効である。そのためには、広く関係する機関と連携して指導することが必要となる。

「読書の幅を広げ、読書の習慣を養うこと」は、生徒個人の人間性を培うばかりでなく、書物から知識や情報を収集し活用する力身に付ける基盤ともなる。今後ますます情報化が進展する社会において、よりよく生きるために、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うことの重要性は一層高まっていくことを認識する必要がある。

このことから、現行の学習指導要領で想定されている中等教育課程における国語教育と読書指導との関係として、大きく三つの問題意識が示されていると指摘することができる。

第一に、生徒が読書について「興味・関心」を持つことを初等教育から中等教育の段階において促し、それを高等教育や生涯学習へと接続させていこうという枠組みが示唆されている点である。第二に、読書指導は学校図書館、司書教諭と国語の教員とが連携して行うことが求められるとされており、その上で、国語の授業外学修活動として実施していくための方策を立てる必要がある。第三に、読書は情報化する現代社会に対応する基本リテラシーを養成するものとして位置づけられており、そのために

生徒が「幅広く読み広げる」ことができるように、教師の側で指導することが求められているのである。

現行の学習指導要領については平成二十八年に前倒し改訂になることがすでに決まっており、したがってこの内容については今後、ある程度変更することについても想定しなくてはならない。しかし、たとえば平成二十五年三月二十九日の中央教育審議会におけるスポーツ・青少年分科会で審議された「第三次『子どもの読書活動推進に関する基本的な計画』」などを見る限り、読書指導についての基本的な枠組みは保持されるだけでなく、より重点化されるものと予測される。

以上の点を確認した上で、本稿でまず問題としたいのは、現在の読書指導の実態である。すなわち、このような問題意識に沿った教育が、果たして本当に実施され、機能しているのかということである。

結論から先に述べれば、中央教育審議会や学習指導要領において示された問題意識と、現在行われている国語教育、読書指導、また生徒・児童による読書の実態とは、少なからずかけ離れた状態にあるように思われる。

そこで本稿では、各種読書調査から出された結果や、現在行われている読書指導の現状について、そこにはどのような問題があるのかを分析していきたい。その上で、生徒・児童が現在抱えている読書の状況を組み替えるためにはどのような教育の方向性が必要なのかについて、考えていくこととする。

2 生徒・児童の読書に関する調査

初等教育から中等教育にかけての読書状況についてひとつの指標となるのは、全国学校図書館協議会が毎日新聞社と共同で毎年五月に行っている「読書調査」(SLA調査)であろう。この結果は、同協議会が刊行している雑誌「学校図書館」の十一月号で、毎年発表されている。このなかで特に広く周知されるのが、一万人規模の調査で示される五月一カ月の「平均読書冊数」と、「不読者」の推移である。ここで「不読者」というのは、一カ月に一冊も本を読まなかった児童・生徒を指している。

しばしば指摘されるように、一九九〇年代においては、子どもがあまりに本を読まないということが非常に問題視されていた。たとえば小学校高学年における一カ月の「平均読書冊数」は一九九五年に五・四冊となったのがもつとも低く、高等学校の生徒の平均読書冊数は一カ月平均一・〇冊にまで落ち込んでいた。これに呼応して、「不読者」の割合も、小学校高学年は一九九五年の一五・五%、高校生では一九九七年の六九・八%がピークとなっている。すなわち、一部の児童・生徒が数多くの本を読んでいる一方で、まったく本を読まない児童・生徒がおり、子どもの読書はその両極端に分岐していた。

このような状況が批判されたことで、子どもの読書に対する問題意識が、一九九〇年代半ばから非常に高まっていた。

たとえば当時の公立図書館の状況を確認すると、一九三〇年代から四〇年代にかけてアメリカのニューヨークのパブリック・ライブラリではじまっていたいわゆる「ヤングアダルト・サービス」が日本の図書館に

紹介されたのは、中村勝哉が一九七九年に『現代の図書館』特別号で「ヤング・アダルト」部門の創設を期待する」を発表して以降だと思われる。^(注1)

この「ヤングアダルト・サービス」については、『みんなの図書館』一九八八年六月号の特集「ヤングアダルトってなに?」や、『図書館雑誌』一九九〇年五月号の特集「子どもたちへのサービスを考える」などで普及が図られているものの、吉田一憲が『図書館雑誌』一九九一年一二月号で示した町田市立中央図書館における実践報告や、『みんなの図書館』一九九四年六月号の特集「YAサービスをやるう」などを見る限り、一九九〇年代半ばまであまり定着していなかったことが窺われる。これに対し、ヤングアダルト出版会が『図書館雑誌』一九九九年九月号に掲載した「公共図書館におけるヤングアダルト・サービスに関する調査集計結果報告」を参照すると、この時期にヤングアダルト・サービスは少なからず普及していることが窺われ、これがちょうどSLA調査で一九九〇年代半ばからの子どもの「不読者」の割合の減少と、一カ月の平均読書冊数の増加に重なりあっていることは、非常に注目される。

また、あとで具体的に示すように、一九八八年に林公と大塚笑子が提唱し、船橋学園女子高校（現在の東葉高等学校）で試みた「朝の読書」が、文部科学省が二〇〇一年を「教育新生元年」と位置づけてはじめた「21世紀教育新生プラン」に盛り込まれたことも、「不読者」の減少に大きく寄与している。「朝の読書」の提唱者である大塚笑子と、書籍の取次を行っている株式会社トーハンを中心とした「朝の読書推進協議会」によれば、二〇一五年一〇月五日に全国の小学校で一六七二七校、中学校

で八六三一校、高等学校で二二一七校まで普及しているとされており、^(注3)小学校高学年の不読者は二〇一四年の調査で三・八%していることや、一九九〇年代に四〇%から五〇%で推移していた中学生の不読者が二〇〇七年以降は一〇%台半ばで推移するところまで回復しているのは、これらの活動の成果だったと考えて良い。

3 読書の実態

しかし、一方で問題としたいのは、「不読者」の割合が減少している一方で、特に中学生から高校生にかけての世代が読んでいる具体的な本の内実である。

たとえば、朝の読書推進協議会が毎年五月に、前年度の「朝の読書」でより多く読まれた本を発表している「朝の読書（学校）」で読まれた本」上位二十冊のリストを見ると、平成二十六年の中学生では柳田理科雄『空想科学読本』、有川浩『図書館戦争』シリーズ、宗田理『ぼくら』シリーズ、じん（自然の敵P）『カゲロウデイズ』、東川篤哉『謎解きはディナーのあとで』、J. K. ローリング『ハリー・ポッター』、川原礫『ソードアート・オンライン』などが並んでいる。また高校生でも、有川浩『図書館戦争』シリーズ、川原礫『ソードアート・オンライン』、和田竜『村上海賊の娘』、百田尚樹『永遠の0』、じん（自然の敵P）『カゲロウデイズ』、有川浩『レインツリーの国』、東野圭吾『探偵ガリレオ』シリーズと続いている。

このとき、中学生、高校生とも、小説以外の書籍として上位二十冊に

挙がっているのは『空想科学読本』のほか、中学生では鎌田洋『デイズ
 ニー ありがとうの神様が教えてくれたこと』と、マンガ作品の蛇蔵・
 海野風子『日本人の知らない日本語』、高校生ではケルト神話研究会『ケ
 ルト神話全書』のみである。また、それ以外の具体的な内訳を見てみる
 と、ライトノベルが中学生では『ソードアート・オンライン』のほか、
 鎌池和馬『とある魔術の禁書目録』、井上堅二『バカとテストと召喚獣』、
 時雨沢恵一『キノの旅』、西尾維新〈物語〉シリーズの五点、マンガのノ
 ベライズ作品が椎名軽穂原作・下川香苗著『君に届け』、藤巻忠俊原作・
 平林佐和子著『黒子のバスケ Repace』の二点、ボカロ小説としてじん
 (自然の敵P)『カゲロウデイズ』、いわゆるライト文芸作品として三上延
 『ピリア古書堂の事件手帖』があがっているほか、テレビドラマ化、映
 画化されたベストセラー小説が残りの小説の大部分を占めている。^(注4) 高校
 生も同様に、ライトノベルが川原礫『ソードアート・オンライン』、西尾
 維新〈物語〉シリーズ、佐島勤『魔法科高校の劣等生』、時雨沢恵一『キ
 ノの旅』、鎌池和馬『とある魔術の禁書目録』の五点、ボカロ小説として
 じん(自然の敵P)『カゲロウデイズ』、いわゆるライト文芸作品として
 三上延『ピリア古書堂の事件手帖』があがっており、読書傾向はほと
 んど変わらない。このような状況は平成二十五年度、平成二十四年度と
 さかのぼっても、基本的に同じような状況になっている。

一方で、SLA調査で毎年男女別に示される「5月1か月間に読んだ
 本」を見ても、ほとんど同じような書名が挙がっていることがわかる。

たとえば、二〇一四年の第六十回調査における高校二年男子では、榎

宮祐『ノーゲーム・ノーライフ』、川原礫『ソードアート・オンライン』、
 百田尚樹『永遠の0』、じん(自然の敵P)『カゲロウデイズ』と並んで
 いる。特にライトノベルは複数巻シリーズとして刊行されることが多い
 のだが、この調査では名前が挙げられたすべての巻を別々に掲載するた
 め、『ノーゲーム・ノーライフ』は一巻、二巻、四巻、八巻、『ソードア
 ート・オンライン』は一巻、二巻、三巻、四巻、五巻、六巻、七巻、八巻、
 十四巻がより多くの生徒が読んだ本として上位に挙がっている。この
 他、ウェブ小説作品としてばっくんちよ(金沢伸明)『王様ゲーム』、ゲー
 ムのノベライズ作品として黒田研二『青鬼』、ライト文芸作品として榎木
 理宇『ホーンテッド・キャンパス』が挙がっているため、挙がっている
 書名三十点のうちライトノベル関連書籍が十七冊を占めるという状態に
 なっている。このような傾向はここ十年ほど顕著に続いており、高校生
 世代では挙がってくる書名の少なくとも半分程度、多いときには三分の
 二以上がライトノベル関連書籍によって占められている。

一方、高校生女子では有川浩『図書館戦争』『植物図鑑』、梨木香歩『西
 の魔女が死んだ』、湊かなえ『白ゆき姫殺人事件』などの一般向けの文芸
 作品が比較的多く見られるものの、中学一年生から二年生にかけての女
 子に、じん(自然の敵P)『カゲロウデイズ』が圧倒的な支持を集めてい
 るのが特徴であろう。

このような状況から、『学校図書館』におけるSLA調査の解説では、
 「シリーズもの」が人気であることが毎年のように指摘されるとい
 うのが、恒例のようになっている。

シリーズものは「続きを読みたい」という心理を受け止めて書かれていて、読者は安心して次を読むことができる。選書の失敗もない。シリーズの中には小学生から高校生まで幅広い層に人気のあるものや長い間読み継がれているものも多い。(『学校図書館』七四五号、二〇一・二・一一)

しかしこの「シリーズもの」という表現は、小学生に長年親しまれている原ゆたか『かいけつゾロリ』から、ライトノベル関連書籍、さらには一般文芸作品である東川篤哉『謎解きはディナーのあとで』まで含まれたあまりにも広い枠組みであり、ほとんど指摘としては機能してないと考えるべきだろう。一方で、二〇一四年の調査で初めて、特にライトノベル作品について、調査報告担当者である山田万紀恵が、高校生男子について次のような指摘をおこなった。

5割に近い不読率と合わせて考えてみると、読まないだけでなく、読む作品の質の低下も問題視したい。ライトノベルばかり読んでいては、読書力を高めることはできない。中学生の興味・関心の広がりやどう伸ばしていくか、教師や家庭、地域の協力のもと取り組んでいきたい。(『学校図書館』七六九号、二〇一四・一一)

従来、ライトノベルも含めた「シリーズもの」については、「多くの高校生に読書の幅広い楽しみを味わってほしい」(二〇一二年調査)、「自分の興味・関心に基づいた読書をしている」(二〇一三年調査)と、中学生から高校生にかけての読書の入口として、あるいは「不読者」を減らすための糸口として、比較的好意的に記述されることが多かった。これに

対し、二〇一四年度調査ではじめて、「ライトノベル」は「読書力を高めることはできない」と、明確に批判される対象として記述されることになったのである。

4 学校教育におけるライトノベルの問題点

このような指摘には、さまざまな問題点が指摘できる。

ひとつには、ライトノベルという枠組みそのものの問題であろう。この用語は現在では、書店と書店に配本をするトーハン、日販などの取次会社が用いている書籍棚の振り分けとして流通しているというのが実態となっている。したがって、公共図書館や学校図書館、学級文庫では用いることができず、ヤングアダルト・サービスの中に組み込むか、ND C分類で九一〇番台を当てて、文庫本の棚に置くことしかできない。このことが、学校教育のなかでライトノベルを扱うことが難しい要因ともなっている。

近代以降の日本社会における「性別隔離」性を指摘しているのは上野千鶴子^(注5)だが、現在の日本の書籍流通は、性別、年代によって棚が分けられ、カテゴリ化されていることがもつとも大きな特徴である。したがって、新城カズマがライトノベルを「ゼロ・ジャンル小説」としたことに示されるように^(注6)、ライトノベルという用語を内容による小説分類としての「ジャンル」という発想から腑分けして考えようとする発想は特にインターネット上のライトノベル読者のあいだで根強く見られるが、小説の制作側の視点から見ると、これは制作と流通の過程を踏まえ、読者

の側で意味づけただけの見当外れな議論にすぎない。ライトノベルは、マンガ、アニメ的なイラストがついており、中高生を対象とした書籍が、男女別に分けて書店の書棚に置かれるときの棚の種類として機能しているものであり、したがってジャンルではなくあくまで書籍の販売カテゴリの問題として捉えられるべきものである。しかも、図書館の分類のよりに内容を見て判断されるものではなく、取次や文庫レベル、書籍の営業の段階で機械的に振り分けられているものにすぎない。たとえばマンガ、アニメ的なイラストがついている小説でも、青年期読者を対象としておらず、成年の一般読者を対象としている場合には、一般文芸としてカテゴリ化されることになる。

したがって、ライトノベルにはあまりにも多様な小説がそのなかに組み込まれており、ライトノベルという用語や枠組みだけを以てなにかを語ることは、きわめて難しい状況だといえる。言いかえれば、ライトノベルを「シリーズもの」という枠組みで捉え、ライトノベルを主語にして語ろうとすること自体が、ほとんど不可能なのである。

一方で、「ライトノベル」は「読書力を高めることはできない」という指摘が、少なからずの射ているという側面もあることは、確認しておく必要があるだろう。これは、ライトノベルがあくまでエンタテインメント小説として刊行されているため、読者が文章を追うだけで、あらずじや内容、テーマが誰でも把握できるように書くことが、きわめて重要視されているためである。

平凡な日々は、愛も哀しみも押しながし、摩滅させ、やがて忘却

させていく。ただただ、残酷なまでに。

あのとき、あの場所で、俺も死んでいたら。

そう、今でも、いつでも。

存在の輪郭が薄れていく。自分が薄れ、保てなくなっていく。

これでいい。これでいいのだ。

消滅に身を任せようとした俺を、衝撃が襲う。

俺という存在を掴む、巨大な黒い手。

五指の先にある爪が、俺を虚無から引き上げていく。

止めてくれ。俺は消滅したい。意識があるという呪いから解放されたい。^(注7)

引用の浅井ラボ『されど罪人は竜と踊る』は、角川スニーカー文庫から刊行が開始され、現在は小学館のガガガ文庫から刊行されているライトノベル作品であり、量子を操作してあらゆる者を生み出す力を持った「咒式士」と呼ばれるガウスとギギナの二人が、様々な陰謀や竜との戦いに巻き込まれていくという物語である。設定の濃密さと、残酷さを描くことをいとわない人間の暗部を描いたことで、特にライトノベル読者のあいだで非常に高く評価されることが多い。引用は少年時代のガウスが妹のアレシエルを戦争で失った場面だが、主人公が怠惰な日々を過ごすことでそのような過去の「愛」「哀しみ」を「忘却」し、そこから逃避しようとする意識が、地の文でそのまま表出されている。このように、一見濃密な「設定」をちらつかせながら、物語の中核となる部分は地の文や作中人物の発話として明確に記述されており、それを読むだけで読者

が最低限のことを理解できるようにするというのは、中高生を想定読者とするエンタテインメント作品であるがゆえの、ライトノベルの書き手としてひとつの欠かせない技術である。その結果、もちろんライトノベルをテキスト分析などの手法で読解することは可能なのだが、そういった方法を本格的に学んでいない生徒による読書の段階では、ライトノベルの読書はあくまで表層として表れた部分の読みが行われるだけであり、その意味で娯楽としての域を出ることは難しい。たとえ読者が小説から問題点を読み取っていたとしても、それは読者自身の読解力の成長を示すものではなく、初等教育程度の読解力があれば誰でも読むことができ、誰でもみつけることができるように書かれた要素に反応しただけであり、国語教育的な読解、およびその能力の向上は期待するのは難しいのである。

もちろん、必ずしもそうとはいえない作品も含まれていることもあるものの、ライトノベルとその関連書籍というカテゴリ全体で見れば、以上のような意味で、あくまで読書の入口、あるいは娯楽としての読書として以上の機能を持たせることは難しいといえる。

5 朝読書とビブリオバトルの問題

それでは、これらの書籍がどのようにして、学校教育のなかに入ってきているのだろうか。ひとつには先に指摘したように、公共図書館のヤングアダルト・サービス、あるいは学校図書館や学級文庫に、ライトノベルが少なからず排架されていることである。特に時雨沢恵一『キノの

旅』シリーズなどは、学校図書館や学級文庫においてひとつの定番として排架される作品になりつつある。

一方で注視したいのは、先述の「朝の読書」や、あるいは近年学校現場で広がりを見せているビブリオバトルに、これらの書籍が持ち込まれる要素が、少なからず内包されていることである。

まず「朝の読書」について林公や大塚笑子は「全校一斉で行う。」「10分間でも毎朝続ける。」「読む本は何でもいい。(但し、雑誌やマンガはダメ)」「本を読むこと以外は何も求めない」という四つを原則として示している。^(注8) 国語の授業で要求されるような感想文や記録を求めないことで、本を読むことのハードルを低くしようという企図である。これは言いかえれば、「不読者」をいかに少なくするかという問題意識に基づいているといえるだろう。そのなかで、「雑誌やマンガはダメ」としてマンガは禁止する一方で、活字で書かれたものであれば「読む本は何でもいい」という線引きが行われたのである。

この活動がはじまったのは一九八八年であり、九十年代からゼロ年代にかけて、ライトノベルという枠組みができる少し前の時期である。後にライトノベルのひとつとして見なされるようになった集英社文庫コバルトシリーズは、編著『ライトノベル・フロントライン』の創刊号でも取り上げたように、氷室冴子、藤本ひとみ、新井素子などをはじめ、必ずしも現在のようにマンガ、アニメと直接的に接続するものではなく、どちらかという一般文芸やSF、ミステリと、児童向け書籍との橋渡しとしての意味合いが強い小説群だった。ライトノベルがエンタテイン

メントにより特化していくようになるのは、ちょうど講談社X文庫
ティーンズハートから刊行された折原みと作品を中心に、より少女マン
ガを意識した低年齢向けの小説が流行しはじめたこの時期であり、ある
いは、神坂一、あかほりさとるなどが、特に少年向けライトノベルの中
心的な位置を占めた一九九〇年代になってからである。その意味で「朝
の読書」が想定した選書の基準は、ライトノベルが現在のようにマンガ、
アニメとほとんど地続きに結びつき、エンタテインメントとしての要素
を強めつつあったことが、ほとんど想定されずになされたものだったと
いえるだろう。

しかし現在の学校現場において、マンガ、雑誌は朝の読書に持ち込ん
ではいけないと指導する一方で、なぜライトノベルは持ち込むことがで
きるのかという理由を明確に、生徒が納得するかたちで説明することは、
よほどこれらの書籍に通じた教員でなければ難しい。そのため、教員が
ほとんどライトノベルを読まないまま活字で書かれた本だという理由だ
けで「朝の読書」で読むことを認められていたり、あるいは、ライトノ
ベルといった場合に特にゼロ年代に流行した「萌え」系の作品群をイメー
ジして、全体像を把握しないままに「朝の読書」で読むことを禁止した
りしているというのが実態のようだ。前掲のSLA調査で山田万紀恵が
ライトノベルでは「読書力を高めることはできない」と断じざるを得な
かったのは、このような学校現場におけるライトノベルの扱いにくさ
ということも、少なからず関わっている。

また、ビブリオバトルについても、同様の問題が指摘できる。ビブリ

オバトルが立ちあがった経緯については谷口忠大『ビブリオバトル 本
を知り人を知る書評ゲーム』^(注10)や、同氏の論文^(注11)に詳しいが、もともとは京
都大学で谷口がおこなっていた読書会の形式に由来した「書評」をおこ
なう「ゲーム」であり、それが現在では多様な広がりを見せるようになって
いる。この「ゲーム」は、次のようなルールによっておこなわれる。

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
2. 順番に一人5分間で本を紹介する
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディス
カッションを2〜3分間行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」
を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを
『チャンプ本』とする。^(注12)

このゲームの特徴は、プレゼンテーションの技術や書評の内容ではな
く、「どの本が一番読みたくなったか？」という参加者コミュニティの判
断によって評価が決められることが挙げられる。すなわち、単純に発表
者が好きな本を紹介すれば良いというわけではなく、参加者の構成や興
味をふまえ、場に応じた本の紹介をしなければならない。その意味で、
参加者同士のコミュニケーションの媒介として書評という枠組みを用い
ていることに、その主眼があると指摘することができる。このことは言
いかえれば、SLA調査で見られたような中高生の読書状況においてこ
の「ゲーム」が実施されると、ほとんど自動的にライトノベル関連書籍
が大量に入り込んでくる可能性を含んでいるのである。

一方で、谷口自身が認めているように、ビブリオバトルは「ゲーム」としてだけではなく、「読書推進の文脈で語られることが多くなった」という状況が生じつつある。^(注13) そのなかで、国語教育、読書指導と接続することを通じて、ビブリオバトルが本来想定していなかったはずの事態が少なからず起きている。このとき谷口は、平成二十五年一月一日にビブリオバトル公式ウェブサイトで出した年頭挨拶で、「一方で、このような公共の場、教育の場におけるビブリオバトルの拡大が続く中で教育の場という特殊性に流され、「ビブリオバトル」が「異なる何物か」にならぬように一定の注意を払っていく必要はあろうと考えています。」^(注14) としており、書物を通じたコミュニケーションの手段としてではなく、選書の段階で「教育的」な配慮がなされ、教師が読ませたい作品や、たとえば伝統的な〈文学〉作品のような、教師の側が教育に持ち込むのに相応しいと考える書籍を恣意的に読ませるための手段となることを、明確に否定している。これらはいわば、読者同士のコミュニケーションを目的とするビブリオバトルという「ゲーム」ととって、いわば本末転倒ともいえる事態だからである。

このように考えたばあい、「朝の読書」もビブリオバトルも、特にそれが学校現場に持ち込まれるときには、選書という点ではさまざまな問題を抱えている。娯楽作品をあくまで娯楽として読む時間に充てている生徒が少なからず存在しているという現状を考えれば、ここでの読書によって国語力や読解力の向上を求めるなどの「教育的」な効果を求めることについては、少なくともこれらの活動に過剰な期待をするべきでは

ないだろう。また、特にライトノベルを読んでいる中高生については、マンガと同様に、「朝の読書」やビブリオバトルなどの機会を与えなくても、自主的に読んでいることが少なくない。言い換えればこれらの活動は、たとえば岩波ジュニア新書やちくまプリマー新書、あるいは講談社ブルーバックスのような論説文、評論を読むことにはほとんどつながらない。したがって、娯楽としての読書ではなく、新しい知識を得たり、読解力を向上させるための読書の機会は、学校図書館と国語をはじめとした各教科との連携を通じて、意識的に生徒、児童に与えていく必要がある。

しかし、筆者も執筆者として参加している金原瑞人とひこ・田中が編んだ中高生向けブックガイド『今すぐ読みたい！ 10代のためのYAブックガイド150』（ポプラ社、二〇一五）などを見ても明らかのように、どうしても中学生や高校生に本を薦めようとする、まずは娯楽として小説を読むよう指導するということが最優先になってしまう。このことが、中学生、高校生の読書指導において、もつとも大きな問題だといえるだろう。

6 おわりに

これまで本論では、中学生、高校生の読書の現状と、学校現場で行われている読書の実態、およびそこで少なからず読まれているライトノベルの問題点について考えてきた。その上で、特に中学生や高校生の読書が、どのように娯楽のための読書に偏っているか、そこにどのような要

因があるのかについて考えてきた。

それではこれからどのように読書指導を行い、国語教育と接続させていけば良いのだろうか。

たとえば米谷茂則は、児童への読書の指導方法として、「a. 楽しみ読みの指導」「b. 調べ読みの指導」「c. 考え読みの指導」「d. 集団読書の指導」「e. 読書集会の指導」という五つの枠組みの必要性を示している。^(注15) この枠組みがどれだけ中等教育に援用できるかについては別に議論する必要があるものの、「集団読書」「読書集会」として「朝の読書」や「プリオバトル」を組み込んだ場合には、それが自動的に「楽しみ読み」につながってしまい、「考え読み」や「調べ読み」などにはつながらない。したがって、教室などの集団で読書を共有する場合には、別の方法で発表会や読書会、討論会を考える必要があるだろう。また、読書感想文においても、どのような本を読むかという選書の段階で娯楽作品が選ばれてしまうことが多く、同じことが指摘できる。

以上の問題を解決するため、特に中等教育において求められるのは、プリオバトルや「朝の読書」、「読書の木」などとは異なる活動で、どのように娯楽としての読書ではない読書の機会を作り出すかという試みである。このような読書と、娯楽としての読書とをいかに両立させていくのかこそが、現在の読書指導における課題なのである。したがってこの具体的な方法については、実践的な授業報告として、別稿にて考えたい。

【注】

(1) ニューヨークのパブリック・ライブラリにおけるヤングアダルト・サービスの問題については、すでに、拙稿「読者」としての〈ヤングアダルト〉——イトノベルを〈教材〉にする」(柳廣孝・久米依子編、二〇〇九年、『ライトノベル研究序説』、青弓社、pp.185-199)で論じている。

(2) 吉田一憲、一九九一年十一月、「YA担当奮戦記——町田市立中央図書館におけるヤングアダルトサービス」、『図書館雑誌』第八十五巻第十二号、pp.803-805。

(3) 「朝の読書」については、株式会社トーハンのホームページ内にある「社会活動」「朝の読書」の項目に「朝の読書推進協議会」からの情報が随時提供が行われている。(http://www.tohan.jp/csr/asadoku/, 2015/10/28)

(4) ここで「ライトノベル」の語は、ひとまず「主として中学生から大学生にかけての学生を想定読者とし、まんがやアニメーションを想起させるイラストを添えて出版される小説群のこと。また、物語の作中人物も、まんがやアニメーションに登場する「キャラクター」として描かれる、キャラクター小説である。」(拙著、二〇一四年、『ライトノベルから見た少女・少年小説史——現代日本の物語文化を見直すために』、笠間書院)にしたがうものとし、それに加えた「カテゴリ」の問題については本論第四項で具体的に触れている。「ライト文芸」とは「キャラ文芸」とも呼ばれ、主に二十代女性を対象として書かれる一般向けのキャラクター小説のことであり、詳細は拙稿「ライト文芸の流行と今後の展望」(大橋崇行・山中智省編、二〇一五年、『ライトノベル・フロントライン——1』、青弓社)で言及している。また、「ボカロ小説」とは、クリプトン・フューチャー・メディアがヤマハの開発した音声合成技術「ボーカロイド」を用いて制作した「初音ミク」などのソフトウェアを用いて作られた楽曲をイメージした小説を、主にその音楽の作り手が書くという作品群であり、mouty(悪ノP)『悪ノ娘』(PHP研究所、二

〇一〇―二〇二二)のヒットによって類似したコンセプトの作品が数多く出版された。

(5) 上野千鶴子、一九八五年、『資本制と家事労働』、海鳴社。

(6) 新城カズマ、二〇〇六年、『ライトノベル「超」入門』、ソフトバンク・クリエティブ(ソフトバンク新書)。

(7) 浅井ラボ、二〇〇三年、『されど罪人は竜と踊る』、角川書店(角川スニーカー文庫)。引用は、二〇〇八年刊行の小学館(ガガガ文庫)版。

(8) 林公、一九九七年、『朝の読書実践ガイドブック 一日10分で本が好きになる』、メディアパル。「朝の読書」の基本的な考え方については、大塚笑子「朝の読書ははじめの一步 生徒と共に歩みながら」(メディアパル、一九九九年)、「朝の読書希望への一步 教育に生かす朝の読書」(メディアパル、二〇〇〇年)に詳しい。

(9) 久美沙織「少女小説は誰のもの?」、嵯峨景子「ジュニア小説の盛衰と「少女小説」の復活 —— 九六〇年代から八〇年代の読み物分析を中心に」、拙稿「一九八〇年代の少女小説を再考する」。「少女の文体 —— 新井素子初期作品における一人称」。すべて、大橋崇行・山中智省編『ライトノベル・フロントライン 1』(前掲)に所収。

(10) 谷口忠大『ビプリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』、文藝春秋、二〇一三。

(11) 谷口忠大・川上浩司・片井修、二〇一〇年、「ビプリオバトル」書評により媒介される社会的相互作用場の設計」、『ヒューマンインタフェース学会誌』第十二巻第四号、pp.93-104。赤池勇磨、谷口忠大、二〇一四年、「ビプリオバトルにおける発表時間制限のデザイン」、『日本経営工学会論文誌』第六五巻三号、pp.157-167 なな。

(12) 注(10)に同じ。

(13) 谷口忠大、二〇一五年五月、「ビプリオバトルとは何か」、『学校図書館』第七七五号、pp.14-16。

(14) 『知的書評合戦ビプリオバトル公式ウェブサイト』「新年の」挨拶 2013年」
<http://www.bibliobattle.jp/home/nian-tou-suo-gan-2013nian> 2013/10/28)

(15) 図書館教育研究会、一九九九年、『新学校図書館通論』、学芸図書株式会社。

〔補記〕本稿はJSPS科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究「15K12828」現代日本におけるメディア横断型コンテンツに関する発信および受容についての研究」、研究代表者：大橋崇行)の助成を受けたものである。

(東海学園大学人文学部人文学科)

Status and Problems in Reading in Junior High School and High School Students

—the relation between "light novels" and Japanese-language education—

Takayuki OHASHI

Key words : Japanese-language education, reading, light novels, library, young adult

Abstract

Japanese-language education is facing a major problem in junior high schools and high schools in Japan. That problem is getting students to read books. Teachers have been working to reduce the number of students who do not read any books at all. Such students are known as *fudoku-sya* in the Japanese education system. The government and municipalities have tried various methods to address this problem, and the number of *fudoku-sya* has been greatly reduced. However, new problems are now occurring. This paper analyzed the results of a number of studies on reading and found that the main purpose of reading for junior high school and high school students is entertainment. The cause of this is, the reading activities taking place in junior high schools and high schools. In light of this, this paper concludes that it is important that students balance reading for entertainment with reading for learning.